

病態生理に基づいた薬物治療学

授業概要

様々な病気のメカニズムを説き明かし、それぞれに適合した合理的な薬の使い方の原理を論じる。「アートとしての治療」から「サイエンスとしての治療学」へと発展させる考え方を学ばせる。実験室データのみに基づく観念論的薬理学ではなく、「臨床における事実」に立脚したサイエンスとしての治療学を理解させるための薬理学を論じる。

担当教員

和田孝一郎（主担当） 教授・薬理学

授業の形式

オムニバス形式を基本とする。

教育内容

1. 病態生理に則した適正な薬を選ぶことは当然であるが、そこには副作用への注意が欠落しがちである。副作用には予測できるものとできないものがある。既知の情報・事実に基づいて科学的・論理的に新たな副作用を予測できる場合も増えつつあり、これを予知し、回避することが可能になってきている。新たなサイエンスである。一方、既知情報からは全く予測不可能な副作用も多い。未知の副作用を断片的事実の山から発掘し、その副作用発生のメカニズムを探ることも新たなサイエンスである。多くの事例に基づいて普遍的かつ興味深いサイエンスとして副作用学を確立する手法、思考過程を論じる。
2. 臨床医学の根元である薬物治療学の進展のためには、実験動物を使った非臨床試験が極めて重要な役割を担っている。本講義では、実験計画の立案、病態モデル動物の作成、薬物効果の解析を如何に進めていくか、その基本概念と問題点を学習することによって自ら新しい研究計画を構築できる基礎能力を養う。

成績評価の方法

演習における質疑応答、ならびにレポートによって理解度・到達度を評価する。

使用テキスト・参考文献

教育内容に応じて随時紹介する。